

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

最終報告提出日

2013年4月1日

派遣生の基本情報

- ・氏名：チョン・ユリ
- ・所属：韓国朝鮮文化研究専攻 博士課程満期退学
- ・派遣形態：平成23年度冬個人派遣 PD

研究テーマ

葬送に関する人類学的研究 ― 近年の韓国における変化を中心に

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

- ・国名：韓国
- ・都市名：ソウル
- ・研究機関名：高麗大学校 韓国学研究所
- ・コンタクトした主な研究者名：ユ・ヨンデ教授

(2) 派遣期間

- ・出発日：2012年4月1日
- ・帰国日：2013年3月26日

本プログラムによる研究期間：2012年4月1日～2012年12月31日（総日数：275日）

私費による期間延長：2013年1月1日～2013年3月25日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

①資料の収集と精読

書籍、論文、マスメディア、政府・自治体の刊行資料、関連業界の業界紙や広報資料などを収集・精読し、韓国の葬送をめぐる最近の言説の動向を把握したい。

②大学の葬礼関連学科や葬礼指導士（葬祭専門家）養成コース、相助会社（日本の互助会のように、契約者に対し葬儀に必要な一切の物品、人手、関連サービスを提供する会社）、専門葬礼式場での参与観察を通じて、葬礼指導士、相助会社、専門葬礼式場の登場が葬送

の変容に実際どのような影響を及ぼしているのかを把握したい。

③葬送儀礼の全過程への参与観察

これまでのフィールドワークは、主に葬法と墓地の変化を捉えることに重点を置き、火葬施設や安置施設での調査が多かったが、今回は、死の準備からお葬式、追慕儀礼に至るまで葬送儀礼の全過程を連続的に観察し、詳細に映したい。

④中小都市と農漁村における葬送の変容に関するフィールドワーク

これまでは火葬率の急増、葬法と墓地の多様化、新しい追慕行為の登場など、葬送の変化が著しい首都圏を中心に事例を集めてきたが、地方の中小都市と農漁村の葬送のあり方を合わせて把握し、大都市から始まった葬送の変化が地方にはどのような影響を及ぼしており、地方の諸主体はそれにどのように対応しているのかを明らかにしたい。

(2) 実際に達成された成果

①資料の収集・精読・分析

葬送の急変に伴った様々な副作用とそれに対する懸念が読み取れる。相助会社、葬礼式場、安置施設（納骨・自然葬施設）の癒着と暴利、政府の政策不在が大きな問題とされている。墓を造らないか最低限の標識だけを残す自然葬への関心が非常に高まっているが、本来の趣旨とは違って商品化の新しい標的になっている。

②大学の葬礼関連学科と葬礼指導士養成コース、相助会社、専門葬礼式場でのインタビュー、アンケート、参与観察

ソウルのD大学のFBA（Funeral Business Academy）コースに登録し、半年間受講した。このコースは既に葬礼関係の仕事に従事しているか、あるいは従事しようとする人を対象に、「葬礼指導士」の資格取得のための理論と実務を1年間にかけて教育している。そして、大田市B大学の葬礼指導科（学部）を訪れ、授業を参観し、教授、学生、卒業生とインタビューを行った。

相助会社は、業界1・2位を競うH相助とB相助の支店を訪ね社員をインタビューし、彼らが実際の「現場」（お葬式）でどのように務めるのか、アシスタントとして参与観察した。一方、2012年12月に開かれた「MBC ウェル・ダイニング・フェア」では、各相助会社のブースで客として相談を受け、商品の内容や営業方式を比較・観察した。

葬礼式場は、大手病院の附属葬礼式場4箇所（大学病院/国立病院/私立病院）、一般葬礼式場3箇所（公営/民営）を見学し、施設、運用、現況を比べた。

都市部の場合、ほとんどの葬儀が専門の葬礼式場で行われ、その7割以上が相助会社に属している葬礼指導士によって執り行われているという。葬儀において遺族と弔問客の役割や負担は減り、確かに楽になった側面はあるかもしれないが、故人と接する機会はむしろ

減り、全くの他人に儀礼の詳細を任せ、言われるまま受動的に動いてしまう傾向が見える。また、相助会社のマニュアル通り行われる葬儀は地域ごと、家ごとの独自性を失い、葬礼商品の値段に合わせて一律的に行われる。儀礼の詳細と意味などの情報は遺族とあまり共有されず、1回限りのイベントのように終わってしまう。葬送についての情報は業界によって独占され、商品化されつつある。

③葬送儀礼の全過程への参与観察

葬礼指導士のアシスタントとして3件の葬式に参加した。この際は葬送儀礼の全過程を観察することはできなかったが、相助会社、葬儀屋、葬礼式場、葬礼指導士、遺族の関係や役割分担、実際の活動を重点的に観察することができた。

一方、二人の知人の家庭に葬式があり、1件は弔問客として、他の1件はアドバイザーとして臨席することになった。この際は、遺族がどのように故人の死を準備し、葬式と追慕儀礼を行い、ふたたび日常生活に戻るのかを連続的に観察することができた。

④中小都市と農漁村における葬送の変容に関するフィールドワーク

今回の調査では、全国で2番目に火葬率が低い忠清南道（錦山郡、洪城郡、世宗特別自治市）で調査を行い、その理由を探ろうとした。その結果、この地域は、他地域ではすでに早くから解体されつつあった地域共同体の絆や規制、儒教的規範が、近年まで依然として維持されており、それが土葬を中心とする伝統的な葬送儀礼が保たれる重要な要因となっているのではないかと考えられる。しかし、この地域に世宗特別自治市が新設され開発ブームが起こり、大手企業が最先端の火葬・納骨施設を建設・寄贈したことによって大きな変化が生じている。したがって、都市部を中心として顕著となった葬送の変容が、一步遅れて地方に伝播されているとは一律的に言いがたく、むしろ地域社会をとりまく多様な内的・外的変化によって、葬送においても変容が起きていると言えるであろう。

(3) 今後の研究展望

長期間にわたった今回のフィールドワークを通して、韓国における葬送の変容の全体像が少しは見えてきたと思う。

ただ、中小都市と農漁村における葬送の変容を論じるには、今回の忠清南道の事例だけでは十分ではないであろう。なので、全羅道や慶尚道など他地域の事例をもう少し補って、都市部と比較してみたい。

そして、これまで重ねてきた諸調査の成果をより大きな枠組みのなかで総合整理し、それに基づいて博士論文を書き上げることを目指している。